

かね

暁鐘の音

78

定年制!

私もだいたい歳を取ったからというわけではありませんが、政府の方で定年の延長問題が議論されているようです。今回は「定年」について考えてみることにします。

定年制というのは、見方によれば年齢による差別です。まだまだ働ける人も、そこで引退を強要されるのですから。そのため、欧米では、定年を定めることを法律で禁止している国もあるようです。そのような国では、年金の支給開始の年齢は決まっております。それと自らの蓄えの状況、あるいは労働に対する意欲や可能性などを総合的に判断して、いつ引退するかは自分で決めるのです。

わが国も高齢化の速度は早く、二〇一〇年には、一五、三五才の人口と六五歳以上の人口とが均衡し、両者で全体の五〇%を占めるようになりまます。そしてこれ以降は、三五歳以下の子供はほとんど減っていきまます。この現実を前にすれば、何らかの形でもっと長く働いてもらわなければ、年金制度以外にもいろいろな制度が破綻することは明らかです。が、だからといって、「定年の延長」という形で対応するのは正しいとは思えません。

「定年の延長」は、年金の支給開始時期を遅らせるのが目的です。政府としては、年金財政の行き詰まりが明らかのため、支給開始時期を遅らせたいため、それにしても、どうして「定年」というかたちで一律に決めなければならないのでしょうか。民主主義を標榜する国にしては、全くおかしな話です。中学校の教科書には「労働の権利」について書かれていて、国民には働く権利や、職業選択の権利がうたわれているのに、国家による「定年」の規定は、明らかにこれに反します。

そもそも企業の「定年」は軍隊の制度から持ってきたものです。確かに軍隊には、その役割に応じてある程度の年齢による制限はやむを得ないでしょう。体力や運動能力、あるいは反射能力などが一定レベル以上でないといえます。そして役所が、同じ公務員ということでの制度を取り入れました。さらに、戦後の経済の復興に合わせるため、国として終身雇用を推進するため、その裏付けとして「定年」という制度を決めて、民間企業に適用していったのです。それ以来、国全体で横一列になって「定年」に向かって突き進んできたのです。確かにそれは一定の「成果」を上げてきましたが、そこには勝つための戦略があったわけではなく、勝てる条件が揃っていたに過ぎ

ません。太平洋戦争に突入する前の状況に良く似ています。

「定年」が法律で決められているという事は、まだ十分に働くことが出来るのに、「定年」ということで働く場を奪われてしまうことを意味します。もちろん例外的にその後「嘱託」といった形で雇用が継続されることはありますが、最近ではほとんど重要な能力を持っていないが無理でしょう。むしろリストラによって、「定年」を「目前」にして、退職を余儀なくされている人が増えています。だが「定年」という

「自ら思索することと読書とでは精神に及ぼす影響において信じがたいほど大きな開きがある。そのため思索向きの頭脳と読書向きの頭脳との間にある最初からのひらきは、ますます大きくなるばかりである」

今月の一言

「人間は考える葦である」とは、パスカルの有名な言葉である。つまり考えることを放棄したら唯の葦に過ぎないというのである。確か、昔の高僧も「人間は糞の塊だ」と言った。綺麗に着飾っても、目糞、鼻糞、耳糞など、穴という穴に糞を詰めて歩いていく、というのがである。思索を放棄した人間は、まさに「糞の塊」に墮ちてしまう危険がある。

人間としての価値を高めているのは思索する生き物だからである。だが厄介なことに、ショーペンハウエルに言わせると、「思索の意思があっても思索できるわけではない」。永らく「思索」の行為を放棄していると、いざというとき

テープがあるため、そのような人たちは、「自分はゴールに達しなかった」という意識に陥る危険がある。このあとの人生に少なからず影響を及ぼすことが予想されます。

それだけではなく、「定年制」はもっと大きな問題を引き起こしています。定年が定められていることで、個人の能力の判定を疎かにしてしまう危険があります。いつまでもたつても日本の企業が個人を評価できないのは、一人ひとりが自分の能力をどのように開発し、どのように活かすかということを考える前に、

に思索しようとしても出来るものではない。思索は、その時点で手に入れている知識や真理を結合したり評価して新しい知識や真理を創造する行為である。確かに知識を手に入れるための読書は有効である。だが、読書という行為は、それ自体思索という行為を殆ど含まない。読書によって得られる知識は、すでに他の人によって考え抜かれたものにすぎない。そのような「古着」をいくら身に纏っても、それは思索の結果ではない。日常の中で、思索の行為を確実に組み込んでおかないと世の中の真理は見えてこない。その結果、表面に現れた状況に振り回されるだろうし、逆に、表面に現れるまで気付かないだろう。

どうやって定年まで(無事に)勤めるかという事に意識が向いてしまっただけです。つまり、社会に対して自分をどう活かすかということよりも、いかにしてそこに居続けるかが問題になってくるのです。

管理者の方も、今、苦勞してその人の能力を判定し、嫌がられることを言わなくても、しばらくやり過ごせば時間が解決してくれるのです。これが個人の能力向上のプログラム開発に力が注がれない一つの原因です。日本の企業が個人を評価できないのは、単に文化の違いだけではありませぬ。

高齢化社会を前にして、少しでも長く働いてもらわなければならないのに、そして、本人は働く意思はあるのに、時代の要請にあわせた能力の開発を怠ってきたために、実際には労働力とはならない、いわゆる「ミスマッチ」となってしまう。大企業の中で、「地位」の衣を着て部下の尻を叩くことで給料をもらってきた人が、その衣を脱いだ状態で、一体何が出来るでしょうか。多くの中高年者は、既にこのことに気付いていません。でも、殆どの人は対応する方法を見出せないでしょう。そして、それに続く世代も、そのような組織に自分を「適わせてきた」ことで同じ道を歩いているのですが、彼らも、はつきりとは気付いていないのでは? ただ、閉塞感として感じていることは確かでしょう。

自分の人生を自分で決めることを放棄しては取り返しがつきません。たとえ「定年制」という制度があろうと、そんなものに自分を適わせる必要はありません。